

聖書：創世記4：1～16

説教題：カインとアベル

日時：2019年12月8日（夕拝）

この創世記4章にはまずエバの出産のことが語られています。前の3章で人間は罪を犯し、大変な災いを自分たちの上に招き寄せることになりましたが、神の恵みによってなお希望を抱きつつ出産することができるという約束が与えられました。そこでアダムは妻をエバすなわち「生きる者すべての母」と名付けたことが3章20節に記されました。その名の通り、エバは新しいいのちをここで出産します。これは人類史上、初の出産だったわけですから、最初の夫婦にとってどんなに神秘的な経験であり、驚くべき出来事であったか計り知れませんが、特に最初の子カインを出産したエバがどれほど大きな喜びに満たされたかは、1節の彼女の言葉に表されています。エバはそこで「私は、主によって一人の男子を得た」と叫んでいます。この子どもが3章15節で約束された人類の希望の星かもしれない！とまで期待したかどうかは分かりませんが、とにかく彼女は言葉に尽くせない大きな希望を抱いたのです。そのあまりもの嬉しさと感激のゆえに、彼女はすべての栄光を神に帰し、神を賛美せずにいられなかったのです。

ところがでした。その喜びを全部打ち消してしまうかのような出来事がこの家庭に起こることを私たちはこの箇所に見ます。あれだけ自分たちに感謝と感激を与え、バラ色の将来を約束してくれたかのように見えた子どもたちの存在を通して、非常に厳しい現実が彼らの目の前で展開したのです。このカインとアベルの事件は単なる兄弟喧嘩として、彼らの間にたまたま起きた事件として見るわけには行きません。人類の2代目にして殺人事件が起こったというこの悲劇は、アダムとエバの罪とのつながりで見られるべきものです。あのエデンの園における罪がこのような形で実を結び、順調に滑り出したと思った幸せな家庭を破壊することになるとは一体誰が予測したのでしょうか。

さてその親から受け継いだ罪は子どもたちの生活の中にどのように芽を出して来たのでしょうか。まず注目したいことは、神にささげ物をするという一見信仰的な行いの中に偽りの要素が巧妙に入り込んでいたことです。カインとアベルはいずれもここでささげ物をしています。彼らは幼い頃から神への信仰について両親から聞かされて来たのでしょうし、ささげ物をもって神に感謝すべきことについても教えられて来たのでしょう。二人ともまさにそのことをここで実践しています。親の目から見れば肉体的ばかりか信

仰的にも立派に成長して来たかのように映る光景がそこにはありました。しかしその礼拝行為のただ中に神に喜ばれない要素がひそかに混じり込んでいたのです。二人のささげものの内、長男カインのものは神に受け入れられませんでした。なぜでしょう。4節に「アベルもまた、自分の羊の初子の中から、肥えたものを持って来た。」とありますが、その次の言葉に注目したいと思います。そこに「主はアベルとそのささげ物に目を留められた」とあります。神がご覧になったのはまず「アベル自身」であり、それから彼の「ささげ物」でした。カインの場合も同じです。5節を見ると、神はささげ物よりも先に「カイン自身」を見られました。そのカインの心こそ神に受け入れられなかった第一の原因だったのです。

そのことは7節の言葉からも分かります。神がそこでカインに問うていることは「あなたは良いことをしたのか」ということです。主は「もし良いことをしているのなら、受け入れられる」と言われました。つまりカインは自分が良いことをしていないことを自分自身、良く知っていたのです。第三者が見たところでは何が問題だったのか見当がつかなかったとしても、神とカインの間では明白だったのです。

さて自分と自分のささげ物が神に受け入れられなかったことを知ったカインはどうしたでしょうか。私たちは続く記事の中にも、罪がいよいよ力を発揮している様子を見ます。まずカインは激しく怒り、顔を伏せました。本来なら自分がしたことを省み、悔い改めるべき場面で彼は怒ったのです。ささげてやっているのに、なぜ文句をつける？といったような感情で一杯だったのでしょうか。そこで神は彼に警告を与えられます。6～7節：「主はカインに言われた。『なぜ、あなたは怒っているのか。なぜ顔を伏せているのか。もしあなたが良いことをしているのなら、受け入れられる。しかし、もし良いことをしていないのであれば、戸口で罪が待ち伏せている。罪はあなたを恋い慕うが、あなたはそれを治めなければならない。』」神はここでカインに悔い改めの機会を与えられました。「なぜ、あなたは怒っているのか」と問うことによって、怒る理由は何もないこと、問題はあなた自身の中にあるということを感じさせようとしておられます。さらに「もしあなたが良いことをしているのなら受け入れられる」と言われます。「受け入れられる」という言葉には印がついていて、欄外に別訳として「顔を上げられる」とあります。良いことをしているのなら顔を上げられる。良いことをしていないなら顔を上げられない。だから今からでも良い行いに立ち返って顔を上げることができる歩みに戻って来なさい。しかしそうせずに、あなたがこのまま悪い道に進んで行くなら、ま

るでライオンが獲物にとびかかるように、罪はあなたに飛び掛かるであろう。そうなれば益々あなたは罪に支配されて、取り返しのつかないことになってしまう。だからそうなる前に立ち返って来なさい。罪が待ち伏せしている戸口の方に進まず、むしろその罪を治め、それに屈しないようにしなさいと語りかけてくださったのです。

ところがカインはこれにどう応答したでしょうか。彼は主が言われたことと全く反対のことをしました。彼は自分のしたことを悔い改めず、自分が勝手に貯めた怒りを爆発させ、それを行動に現したのです。最初に戻って正しいことをする代わりに何も悪くない弟を妬み、彼を殺害するという全く悪い道へと進んで行ったのです。神の警告を無視すると人はこうなるのでした。彼は待ち伏せしていた罪に捕まるためにわざわざ自分から進んで行き、ついにはその完全な奴隷となったのです。彼は自分の妬みと怒りのために、すべての見境がつかなくなってしまう、これまで一緒に成長して来た自分の弟アベルを気が付いた時には殺してしまっていたのです。

続く記事を読む時に驚かされるのは、こんなカインに対してなおも悔い改めのチャンスを与えようとされた神のお姿です。9節で神は「あなたの弟アベルはどこにいるのか」とカインに呼びかけられました。思い出されるのは、罪を犯したアダムに対して神が「あなたはどこにいるのか」と語りかけられたあの3章9節の言葉ではないでしょうか。もちろん神は教えてもらわなくても、アベルがどんなにひどいことをされたか、知っていました。しかし神はそれをご自身の口から言うのでなく、カインの方から告白することを願われたのです。つまりカインが悔い改めて正しい道に戻って来ることを願われたのです。ところがカインはまたしてもこのチャンスを足蹴にしました。「知りません。私は弟の番人なのではないでしょうか。」と皮肉っぽく答える彼の言葉には、自分が犯した罪を少しも悲しもうとはしてない彼の悲しい心の状態がはっきり表れています。

主はそんな彼に、両親に対してしたようにさばきを宣告しなければなりません。カインは大地を耕す者でしたが、今後いくら働いても、大地はあなたのために作物を生じない。またあなたは地上をさまよい歩くさすらい人となると神は宣告されました。それに対するカインの反応も読む私たちが落胆するようなものでしかありません。13～14節に示されているのは「結果」ばかりに悩んでいる彼の姿です。本来カインは自分が犯した罪の大きさにこそ頭を抱えて悩まされるべきだったのに、彼の頭を駆け巡っているのは自分が受けようとしている刑罰の重さだけです。それは不当に大き過ぎて私には耐

えられない！と訴えるだけです。

そんな悔い改めのかけらもないカインに対して、ほとんど信じがたいことですが、神はなお大きなあわれみを垂れてくださいました。15節で主はカインが打ち殺されることがないように「一つのしるしをつけられた」とあります。これは具体的に何であったのか、今日の私たちは知ることができませんが、カインにとっては確かに自分はこれによって誰かに殺されることはないと確信できる何らかの絶対的保証をもらったのでしょう。主はこうして、だからこのことについては心配せず、あなたは正しい歩みに立ち返るように！と働きかけてくださったのではないのでしょうか。

しかし悲しいこと、そして恐るべき事実は16節の御言葉です。そこに「カインは主の前から出て行った」とあります。これは単に神とお話した場所から出て行ったという地理的なことを語っているよりも、彼の霊的な状態を表す言葉ではないでしょうか。カインは神から絶対守っていただけるという約束を取り付けると、それで一気に安心して、後はさっさと自分勝手な道へと進んで行ったのです。神がこれほどまでに示して下さった憐れみと忍耐の目的を少しも理解せず、その上にあぐらをかき、とうとう悔い改めることをせず、ついには主の前から出て行ったのです。これが彼の究極的運命について何を意味するかは、改めて申し上げる必要もないことでしょう。そう思う時、「カインは主の前から出て行った」というこの一節は、「あまりにも厳粛な一節」と言わざるを得ません。

このように今日の箇所には私たちが見るのは罪の一層の進展です。カインの罪はアダムとエバの罪の繰り返し以上のものです。どんな罪でも罪は罪ですが兄弟のいのちを奪ったカインの罪は両親の罪よりもっと大きいと言わざるを得ません。また神から罪を問われた時、最初の両親アダムとエバは、言い訳や責任転嫁をしつつも嘘は言いませんでしたが、カインは弟アベルについて尋ねられた時、「知りません！」と明白なウソをつきました。さらに「私は弟の番人なのではないですか」と、人を小馬鹿にしたようなもの言い方をしました。また最初の両親は神のさばきの宣告を黙って聞きましたが、カインは猛烈に抗議しました。そして自分が求めるものだけを受け取るとさっさと御前から出て行ったのです。

罪はいよいよこの世界の上に広がり、力を振るおうとしています。しかしそんな中、

ただ悲観することしか、この世界にはないというのではないことにも私たちは目を留めたいと思います。今日の箇所にはカインの姿が主に記されましたが、希望の光は一方にはアベルのような信仰者も存在したことです。ヘブル人への手紙 11 章には信仰の偉人たちのリストが出て来ますが、そのトップにこのアベルが出て来て、こう記されています。「信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神に献げ、そのいけにえによって、彼が正しい人であることが証しされました。神が、彼のささげ物を良いささげ物だと証ししてくださったからです。彼は死にましたが、その信仰によって今もお話しています。」 その後の 6 節に「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません」とありますが、アベルはこの信仰により、神に喜ばれる歩みをささげたのです。また一方のカインに対しても、神が驚くほどのあわれみをもって、罪の道を行かないようにと何度も警告し、関わり続けてくださったことも十分に心に留めたいと思います。神は罪が力を発揮しようとするこの世を冷ややかな目で傍観しておられる方ではないのです。悪の道を進まないように、むしろ早くに正しい道に立ち返るようにと招き続けてくださるお方です。

私たちはこの驚くべきあわれみをもって働きかけられた神のお姿を仰ぎつつ、それを最後まで退けたカインの道を行かないように戒められたいと思います。カインと似た性質が自分にあることを思うなら、早くに悔い改めて神に立ち返る歩みに進む者でなくてはならないと。罪は私たちの上に恐ろしい力を発揮しようとしています。神の恵みによりアベルのような歩みが私たちにも可能とさせられています。この神を仰ぎ、神への信仰によって生きるアベルの道を私たちも進む者でありたいと思います。罪に支配されず、むしろ神の恵みと力によって罪を治め、神に喜ばれる歩みをささげる者、そして神が備えてくださったいのちと救いの道を歩ませていただく者へ導かれて行きたいと思ひます。